

IMS Japan賞について

日本IMS協会運営委員長・IMS
JAPAN賞選考委員長

山田 恒夫

◆ 設立

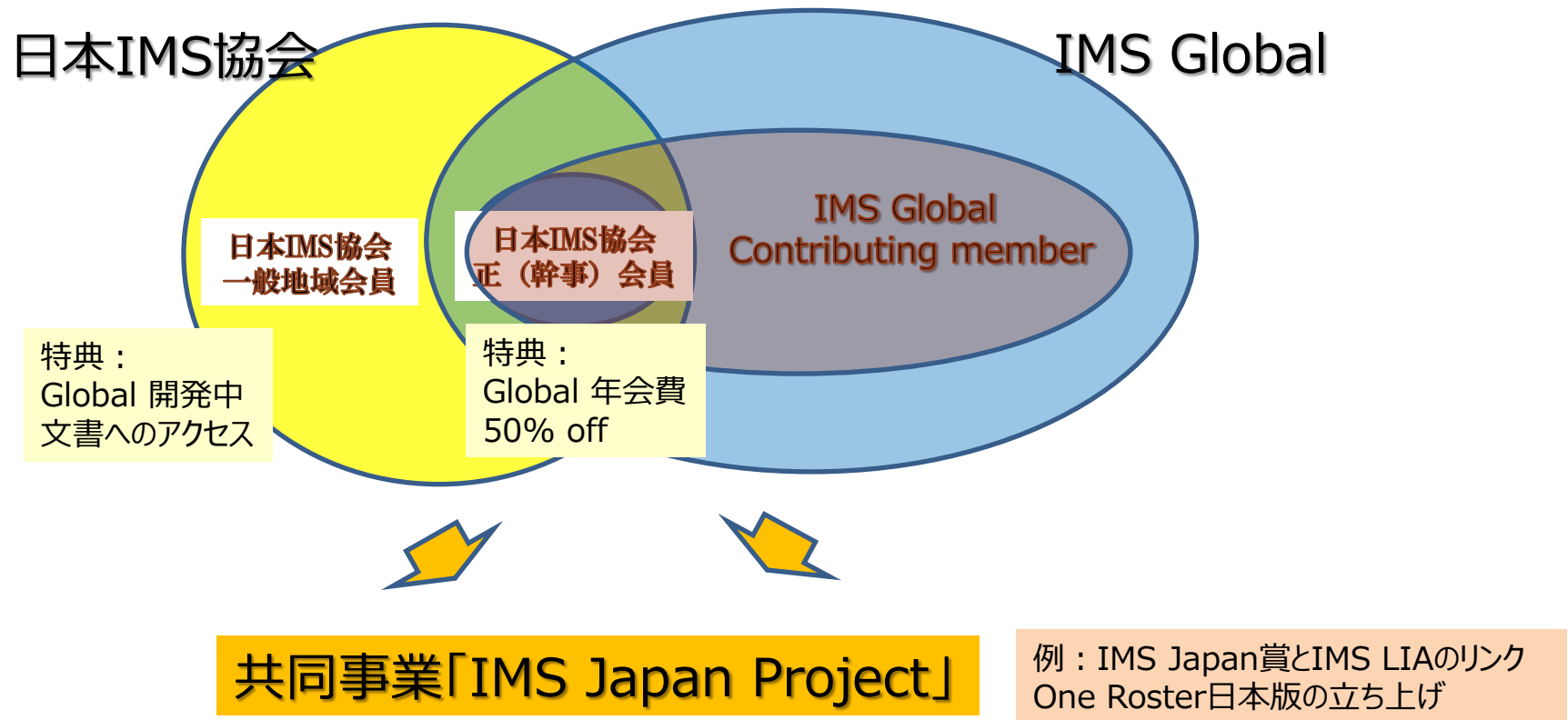
2016年（平成28年）6月3日

◆ 事業内容

- IMS-GLCの諸技術標準の広報・普及
- IMS-GLCの諸技術標準に関連する研究コミュニティの形成・育成、並びにIMS-GLCの諸技術標準に関連する調査・研究の推進
- IMS-GLCの諸技術標準の導入支援のためのワークショップ、セミナー、交流会などの開催
- 日本及び国外の関連諸団体との交流・連携
- 日本及びアジアにおいて、IMS-GLCの諸技術を用い、eラーニング等を活用する人材の育成
- その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

日本IMS協会とIMS Globalの関係

IMS Global Learning Consortium（略称：IMS-GLC）に、日本から参加する団体、及び日本国内での普及活動を行う者により構成する自主的な組織であり、IMS-GLCの諸事業の日本国内での普及を目的とする。



LIA

Learning Impact Awards

- ✓ 2007年から
- ✓ 2段階選抜
- ✓ 国際的な広がり
 - ✓ 地域予選実施地域
 - ✓ 韓国
 - ✓ 豪州
 - ✓ 日本（2017年度予選）
 - ✓ ヨーロッパ

LIA2022への道程:

1. IMS Japan賞への応募（7月末）
2. 同 1次選考結果発表（8－9月）
3. 同 表彰(日本 e ラーニング大賞にあわせて、
11月)
4. LIA Awardへの応募（12月末、予定）
5. 同 本選(米国、5月予定)

講評

IMS Japan賞選考委員会

IMS Japan 賞選考委員会

- ✓ 山田恒夫（放送大）
- ✓ 常盤祐司（法政大）
- ✓ Rob Abel（IMS Global CEO）

本年度審査の概要

- エントリーは67件、うち15件から一次審査の応募をいただいた。例年に比べ、応募総数は少なかった（昨年度エントリー75件、一次審査応募24件）。
- 今回も2段階の審査を行った。まず、日本語による応募資料をもとに、日本人審査委員2名による1次審査を実施した（9月13日、オンライン）。
- 1次審査を通過した作品については、英語による追加説明資料（IMS GlobalのLearning Impact Award（LIA）の1次予選として、LIA のApplication Formに則った応募書類、概要説明リーフレットおよび説明ビデオ）を提出
- 海外委員（Rob Abel、IMS Global Learning Consortium CEO）を加えた3名が英語による2次審査を行った（10月18日、オンライン）。

各賞の評価基準

最優秀賞	<p>IMS技術標準など国際技術標準を採用し、複数のステークホルダーの参加する教育デジタルエコシステムを構築し、それによって教育や学習のイノベーション（いわゆる教育DX）を実現した、あるいはその実現を企図した作品や実践。</p> <ul style="list-style-type: none">・グローバルな観点で、優れた実践（Good Practices）として共有できるもの・デジタルエコシステムによる教育DXの実現をめざしているもの・複数のベンダー、ステークホルダー間でのデータ連携を目的とするもの
優秀賞	<p>IMS技術標準など国際技術標準を採用し、高度なデータ連携によって、新たなサービスや実践を実現した、あるいはその実現を企図した作品や実践。</p> <ul style="list-style-type: none">・グローバルな観点で、優れた実践（Good Practices）に発展する可能性を期待できるもの・IMS技術標準によりデータ連携を図り、相互運用性を実現するもの
特別賞 奨励賞	<p>IMS技術標準の採用に至ってはいないが、単体として、我が国の教育や学習のイノベーションの実現に貢献した、あるいは貢献する可能性のある独創的な作品や実践。1つの製品（アプリ、サービス、コンテンツ）にとどまるが、今後のイノベーションを期待させるもの</p> <p>特別賞： IMS技術標準の採用によってさらなる発展が期待できるかという観点で特に可能性の高いもの</p>

最優秀賞

応募者	株式会社内田洋行
製品・実践	学校向け 学習eポータル L-Gate（エルゲート）
講評	<ul style="list-style-type: none">・ L-Gateでは「デジタル・エコ・システム」を開発コンセプトとしており、複数のIMS技術標準によってベンダーが異なってもシステム（ツール）の連携を図るという構想は高く評価された。・ 文部科学省の実証事業であるテストシステムとの連携にLTIを採用したことを端緒とし、今後、LTIによるシステム連携とOneRosterによる名簿情報の共通化を軸に、他社ベンダー・他団体との連携によるデジタルエコシステムの実現を進める点も評価された。・ さらに、OneRosterの日本での適用事例を他社ベンダーと共有し、OneRosterを日本国内で適用する際の基準とするOneRoster Japan Profileの策定を、日本IMS協会での活動を通じて進めている点も、高く評価された。

優秀賞

応募者	カシオ計算機株式会社
製品・実践	ClassPad.net
講評	LTI技術標準により、他社製のツールやコンテンツも組み込める総合学習プラットフォームを指向する点が評価された。ただ、現時点ではLTIは実装されておらず、今後の製品化に期待したい。

優秀賞

応募者	放送大学学園
製品・実践	学習管理システム（LMS)内の学習ポータル上で放送大学学園がオープンバッジを発行する意義
講評	<ul style="list-style-type: none">・将来的には、成績証明書型のものも含め、デジタル・クレデンシャル・エコシステムを構想していること、オープンバッジをブログで掲示したり、外部の就職活動等にも対応できるように、他のシステムとの連携も想定した設計を施しており、学習者の継続的な学習（生涯学習など）を支えようとする点も高く評価された。・海外委員からは、2014年の放送大学MOOCでオープンバッジを採用し、その後中断はあったものの、今回事業化したことについて高く評価すべきとの意見があった。

優秀賞

応募者	株式会社デジタル・ナレッジ
製品・実践	AI型語学4技能学習パートナーアプリ「トレパ」のIMS国際技術標準QTI/LTI 対応PoC実証
講評	PoC(Proof of Concept: 概念実証)の段階ではあるが、複数のIMS技術標準を実装し、デジタルエコシステムへの対応を示していることは高く評価された。